

資料紹介 熊本博物館所蔵の古墳時代鉄製品二題

宮代栄一¹⁾・栗林誠治²⁾・美濃口紀子³⁾

1 はじめに 一出土遺物の再検証一

本稿で紹介する考古資料は、当館所蔵品のうち、古墳時代の二遺跡から出土した金属製品である。いずれも発見されてから約半世紀を経た資料であり、このうち一部資料については、過去に図面・写真が報告・掲載されたものも含まれている。

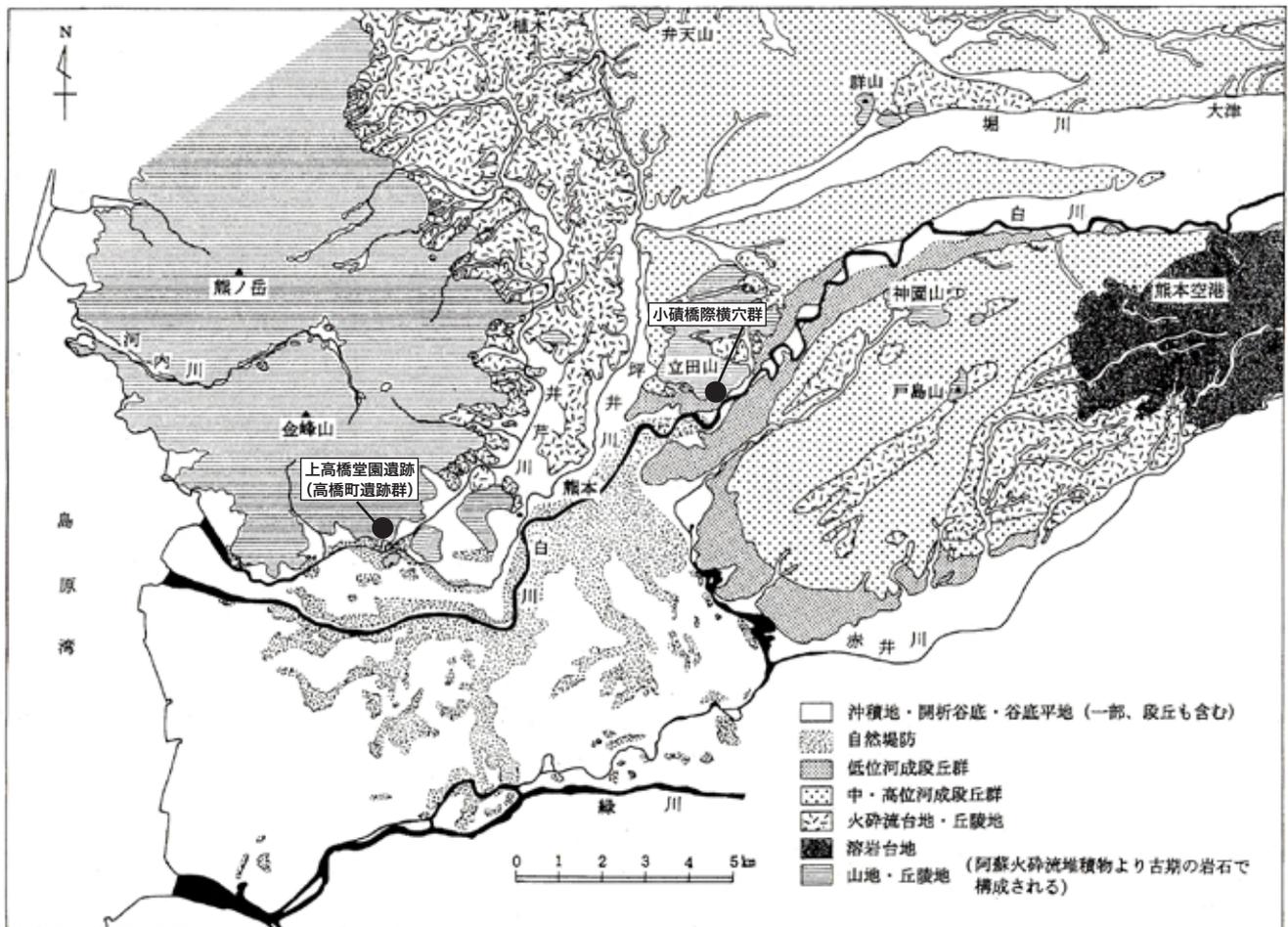
今回あらためて資料紹介を行う理由としては、主に以下の2点が挙げられる。

1) いずれも古い時期の報告であり、学術的な検証が不十分であった。従来から博物館考古常設展示室に陳列していたが、博物館リニューアルオープン以降は、よりわかりやすい展示解説を目指したい。そこで資料同定や復元等の試みも含めてあらためて検証してみたい。

2) 金属製品は経年劣化が次第に進んで行くため、文化財として未来へ引継ぐためには保存処理が必要となるが、本稿で取り上げている金属製品の一部についても近年になってから保存処理を実施した。保存処理の作業実施時には、破損部分の接合・復元等も試みるため、本来の形状や素材について、新たな所見が得られる場合がある。こうした近年の成果についても併せて紹介したいと考える。(美濃口)

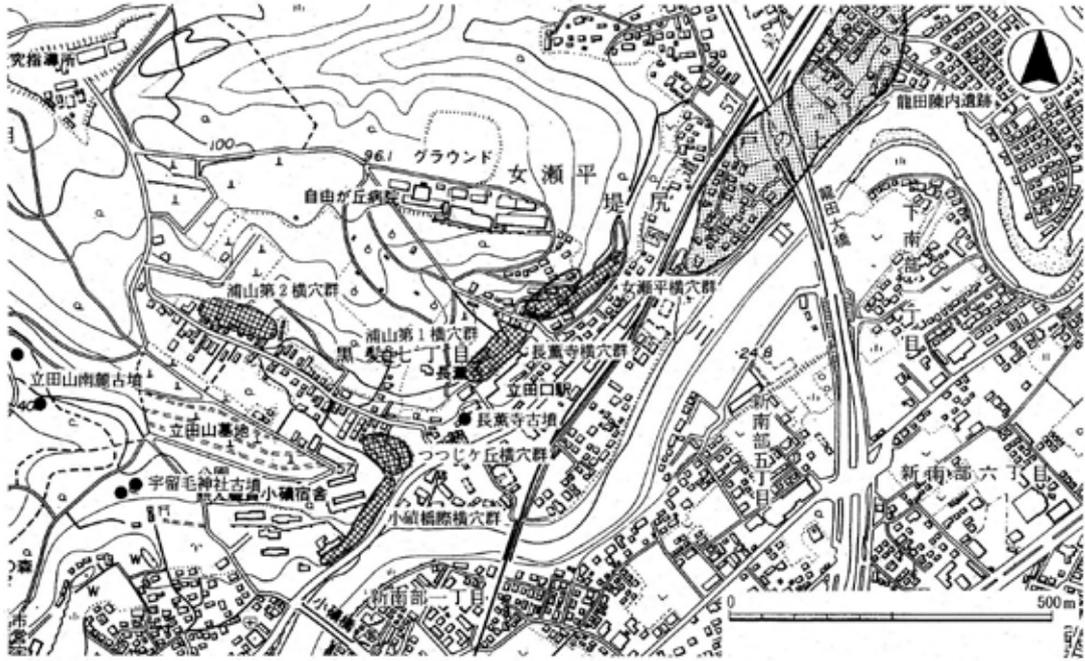
2 熊本市の二大古墳地帯

本稿で紹介するのは「小碓橋際横穴群」と「上高橋堂園遺跡」の2遺跡で、熊本市の二大古墳地帯を成す「立田山の東南麓」と「金峰山の南麓」にそれぞれ所在する。(第1図)。金峰山南麓の古墳群が、



第1図 古墳の位置及び周辺の地形分類 (渡邊1998に加筆)

1) 朝日新聞 編集委員 2) (公財) 徳島県埋蔵文化財センター 専門研究員 3) 熊本博物館 考古担当学芸員



第2図 小碓橋際横穴群及び立田山東南麓の古墳・横穴（松本1996に加筆）

円墳と箱式石棺とで形成されるのに対し、立田山東南麓は円墳と横穴群からなる。また、年代的にも金峰山南麓がやや先行する。立田山東南麓の横穴群は、白川の上流部から女瀬平横穴群、長薫寺横穴群、浦山第1横穴群、浦山第2横穴群、つつじヶ丘横穴群、小碓橋際横穴群と呼ばれているが、第2図に示したとおり本来は一連の横穴群であり、各横穴群はその中の支群と考えられる。これらの横穴群は、宅地開発等で破壊されたり埋没したものが多く、実数は確認できないが、相当数の群になるものと考えられる。（美濃口）

3 小碓橋際横穴群出土の轡について

1) 遺跡の調査

小碓橋際横穴群は、熊本市北区黒髪7丁目に所在する。白川右岸の立田山東南麓は丘陵が白川まで迫っており、小碓橋際横穴群はこの丘陵斜面（標高約22～34m）に立地している。その裾部を削って旧国道57号線（現：熊本県道337号熊本菊陽線）が走っている。

この横穴群は江戸時代、寛政8年（1796）の洪水によって発見されたと伝えられ、白川の水位が旧国道面まで達し、低い位置にある横穴の床を流れたという。その後は郷土誌に紹介される程度であった

が、戦時中は下段のものが防空壕に転用された。

1955年の秋、交通量の増加やカーブによる見通しの悪さを解消するため、旧国道57号線の拡幅が行われることになり、工事が開始された。これを知った前田一洋氏（熊本大学教育学部学生：当時）が乙益重隆氏（熊本女子大学教授：当時）に連絡し、工事と並行して緊急に調査が行われた。横穴内部で作業をしている間も、近くでダイナマイトによる発破が行われるなど、命がけの調査であったという。

横穴は、旧国道とほぼ同じ高さに1列（下段）、その3mほど上部に1列（中段）、さらに中段の4mほど上に1列（上段）の3段にわたって築かれていたが、6基を除いて前面が破壊され、奥壁の一部を残すにすぎなかったという。乙益氏は、横穴の総数を40余基と推定している。

第1表 小碓橋際横穴群出土遺物一覧（乙益1971）

出土品→	鉄製品						装身具		土器		骨	
	鉄 鍬	刀 子	刀 装 具	馬 具	鉄 斧	鉄 鎌	金 環	玉 類	土 師 器	須 恵 器	人 骨	獸 骨
横穴名↓												
第3号	7	7	1	3	2	1	5	7	○	○	○	・
第4号	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	○
第5号	・	・	・	1	・	・	・	・	○	○	・	・
第6号	・	・	・	・	・	・	・	・	・	4	・	○

注) 「・」は該当遺物なし、「○」じは破片一括を示す。



第3图 小碛橋横穴群実測図 (乙益1971)

1～6号横穴の出土遺物内訳は、第1表のとおり。報告では出土状況等が明らかでないため、本稿で紹介する轡についても、どの横穴から発見されたものかは不明である。但し、馬具をはじめ鉄鏃・刀子などの鉄製品や、金環・玉類などの装身具など、副葬品の多くが3号横穴からの出土品であるため、本資料も3号横穴出土の可能性が高い。(美濃口)

2) 収蔵に至る経緯

1955年の調査後、出土遺物は熊本女子大学にて一括して保管されていたが、1970年に乙益氏が國學院大學教授に就任され東京へ転居される際に、当館に収蔵されたものである。(美濃口)

3) 遺物の詳細

2016年3月末現在、小碓橋際横穴群出土として熊本博物館に保管されている土器以外の遺物は、耳環9、ガラス丸玉3、切子玉1、管玉1、勾玉1、小刀1、刀1、鞘口金具1、斧1、鉄鏃21、轡2、イモガイ装辻金具1、イモガイ円盤2、鍔片1、鉤金具1、飾り鉾1である。

美濃口氏が別項で触れているように、乙益重隆氏の「宇留毛小碓橋際横穴」には、出土遺物の一覧表があつて、第3号、第4号、第5号、第6号のそれぞれの横穴から遺物が出た旨が数量のみ記されている。

しかしたとえば、第3号横穴からは鏃7、刀子7、刀装具1、馬具3、鉄斧2、鉄鎌1、金環5、玉類7、土師器、須恵器などが出土したとされるが、小碓橋際横穴群出土として現在保管されている遺物は鏃だけでも21あり、数字があわない。しかし、ここでは便宜上、すべて小碓橋際横穴群出土品として報告しておく。

小碓橋際横穴群出土の装身具類のうち、耳環は小さなもの(第4図-1)が直径1.6cm、大きなもの(第4図-3)で直径2.6cmほどの大きさで、計8点ある。材質は第4図-1～7が鉄地銀張であり、8はおそらく銀製ではないかと推定される。また、第4図の1及び2、3及び4、6及び7はその法量等からみて、対になると考えられ、合計5組の耳環が出土していると考えられる。

玉類としては、ガラス丸玉3、切子玉1、管玉1、

勾玉1がある。

ガラス丸玉は第4図-9及び10が緑色、11が青色を呈し、いずれも直径1cm、厚み0.7cmを測る。切子玉(第4図-12)は水晶製で長さ2.2cm、直径1.7cmを測る。

管玉(第4図-13)は碧玉製で長さ2.1cm、直径1.2cm、勾玉(第4図-14)も同じく碧玉製で長さ2.6cm、中央部の幅1.2cmを測る。

武器類としては刀1、鞘口金具1、鉄鏃21がある。

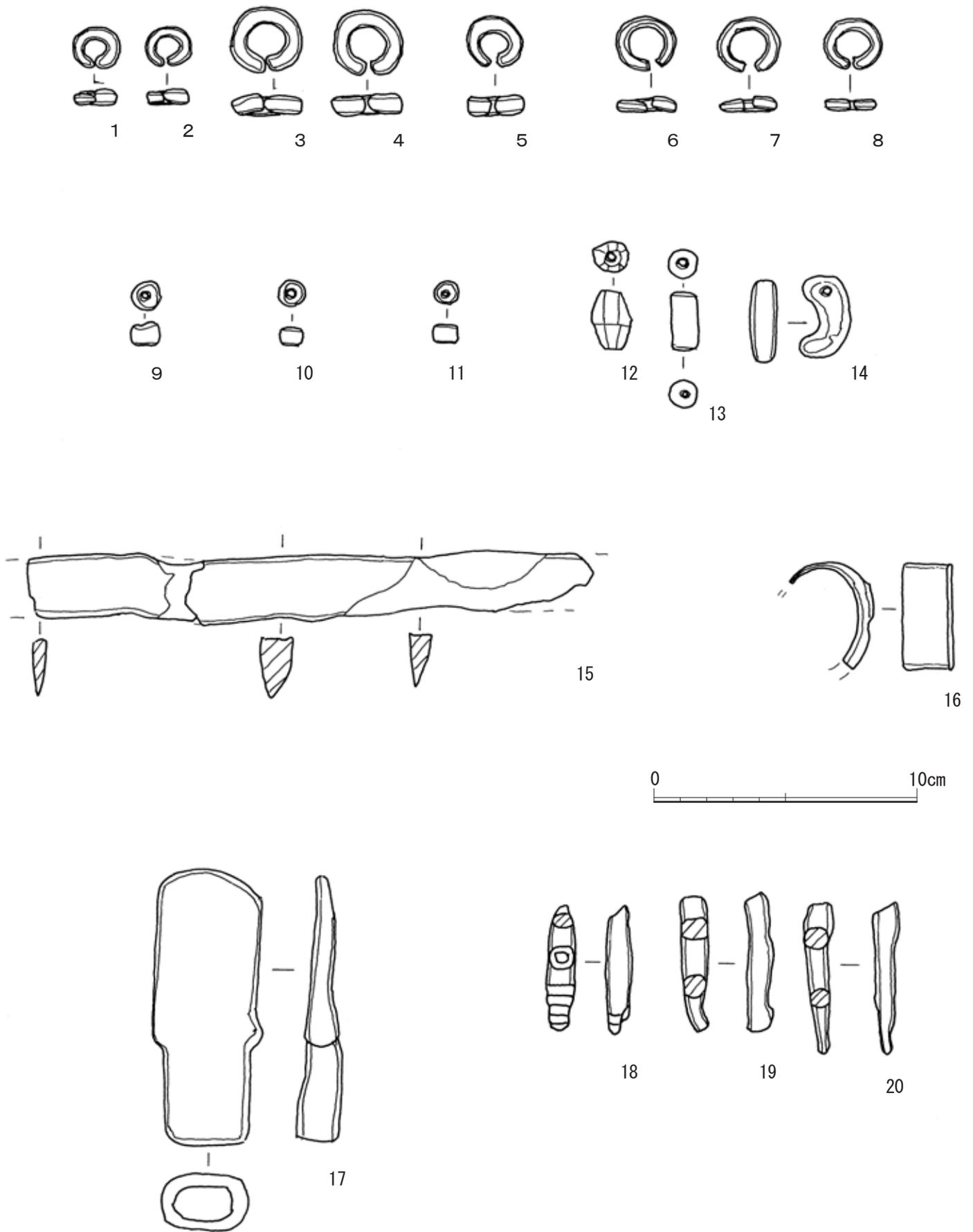
このうち、小刀(第4図-15)は鉄製で長さ21cm、幅2.4cm。鞘口金具(第4図-16)も鉄製で、復元できる長径4cm、短径2.6cm前後、長さ3.6cmを測る。刀は破損が大きく、計測できなかった。

鏃はいずれも鉄製で、細身の鏃と広身の鏃に分けられる。広身の鏃は5点が出土しており、第5図-1、2、5は棘関短頸撫角関柳葉広身鏃、3及び4は角関短頸方頭鏃である。

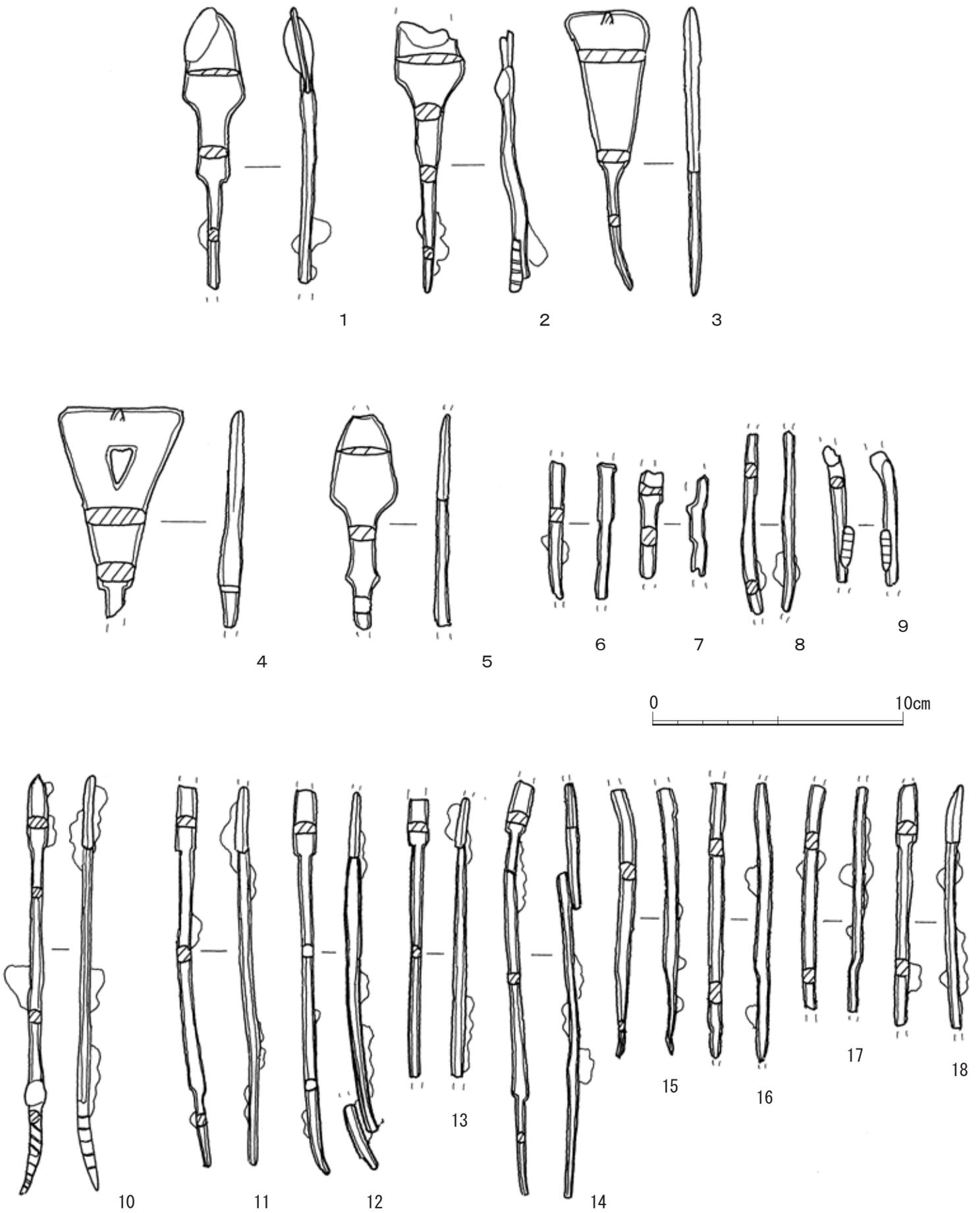
法量は1が全長11cm、鏃身部の長さ7、同幅2.4cm、2は残存長10.4cm、鏃身部の幅2.8cm、3は全長11cm、鏃身部の長さ7.4cm、同幅3.2cm、4は全長8.6cm、鏃身部の長さ7.4cm、同幅4.8cm、5は全長8.6cm、鏃身部の長さ6.8cm、同幅2.6cmを測る。4は鏃身部に三角形の透かしを有するのが特色である。時期は棘関短頸撫角関柳葉広身鏃に陶邑編年のTK43型式期～TK209型式期、角関短頸方頭鏃にも同じくTK43型式期～TK209型式期を与えることができる。

ただし、第5図-4は茎部にはっきりした関を成形しているので、TK209型式期まで下る可能性が高い。第5図-3についても、鏃身部がかなり薄くなってきたので、あるいはTK209型式期に絞り込むことができるかもしれない。

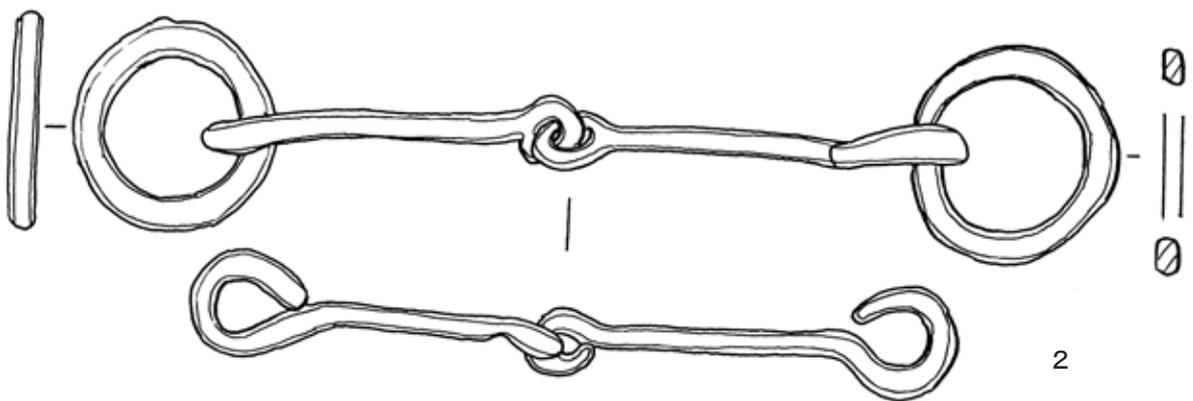
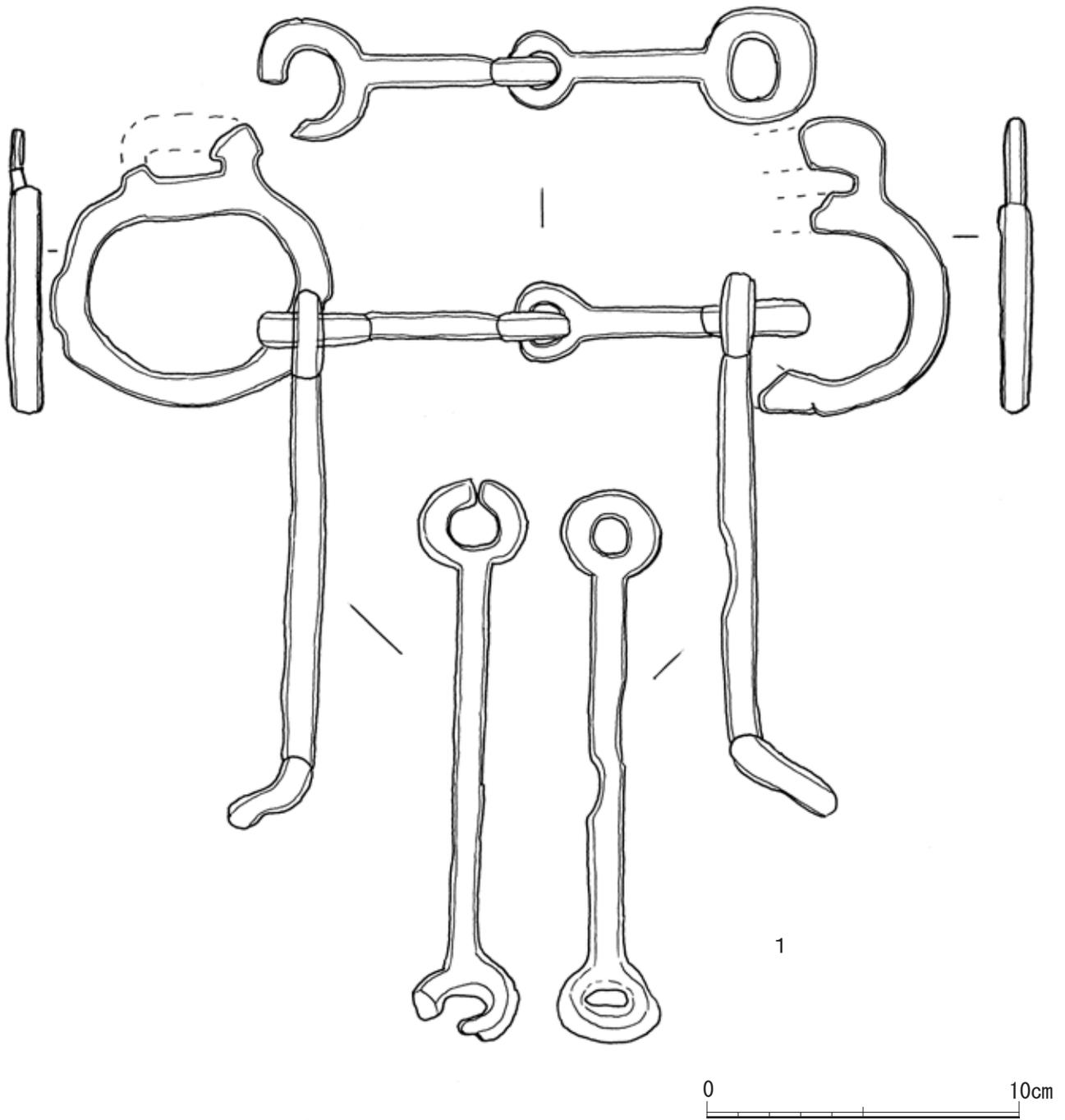
細身の鏃と思われる破片は13点が確認された(第4図-18～20、第5図-6～18)。第4図-18～20のように、茎部しか残っていないものも多いが、確認できる限りではすべてが棘関長頸三角形鏃で、最も残りのいい第5図-10は全長17cm、鏃身部の長さ3cm、同幅0.6cmを測る。時期の判定



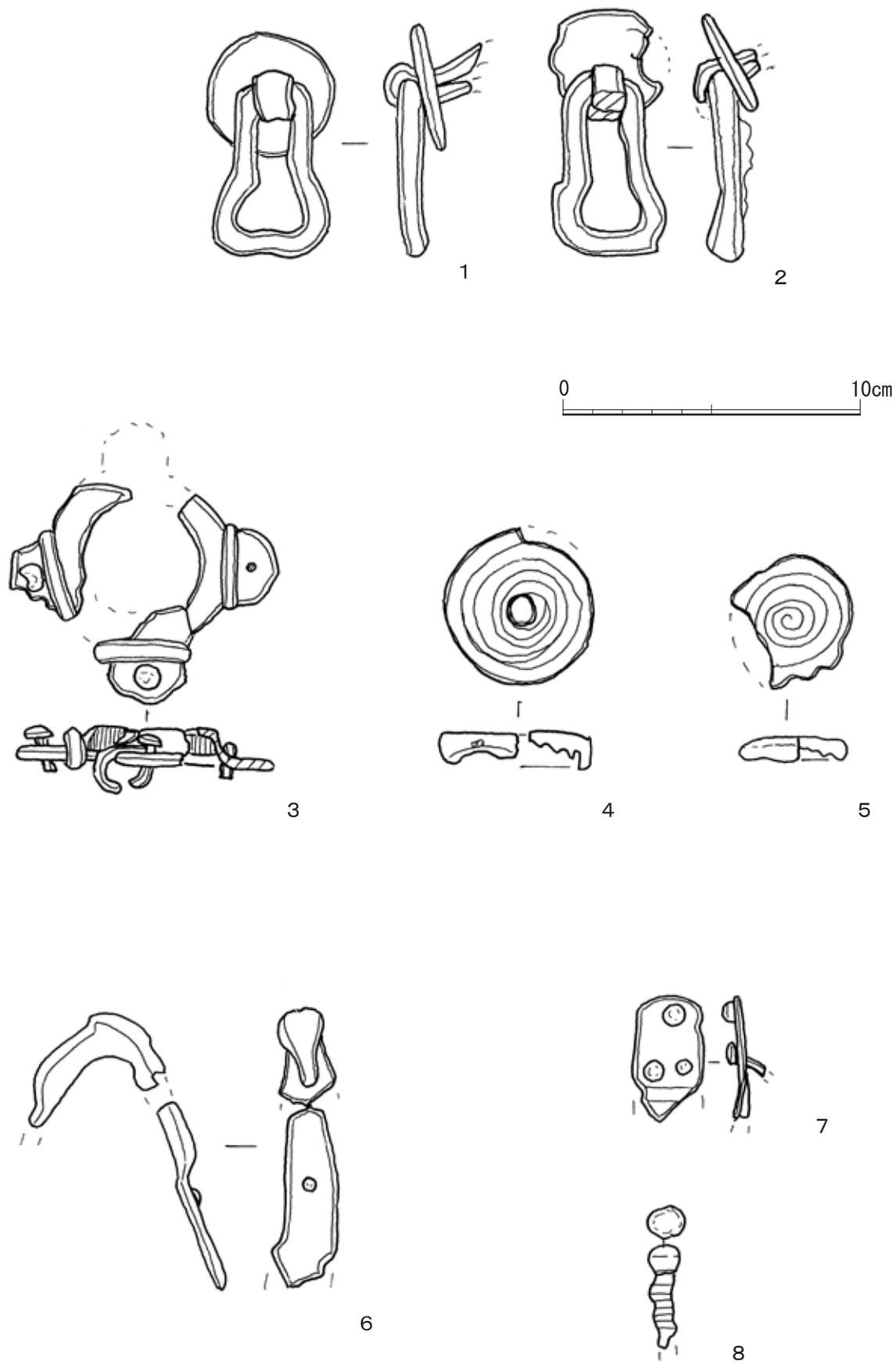
第4図 小碓橋際横穴群出土遺物1 (S=1/2)



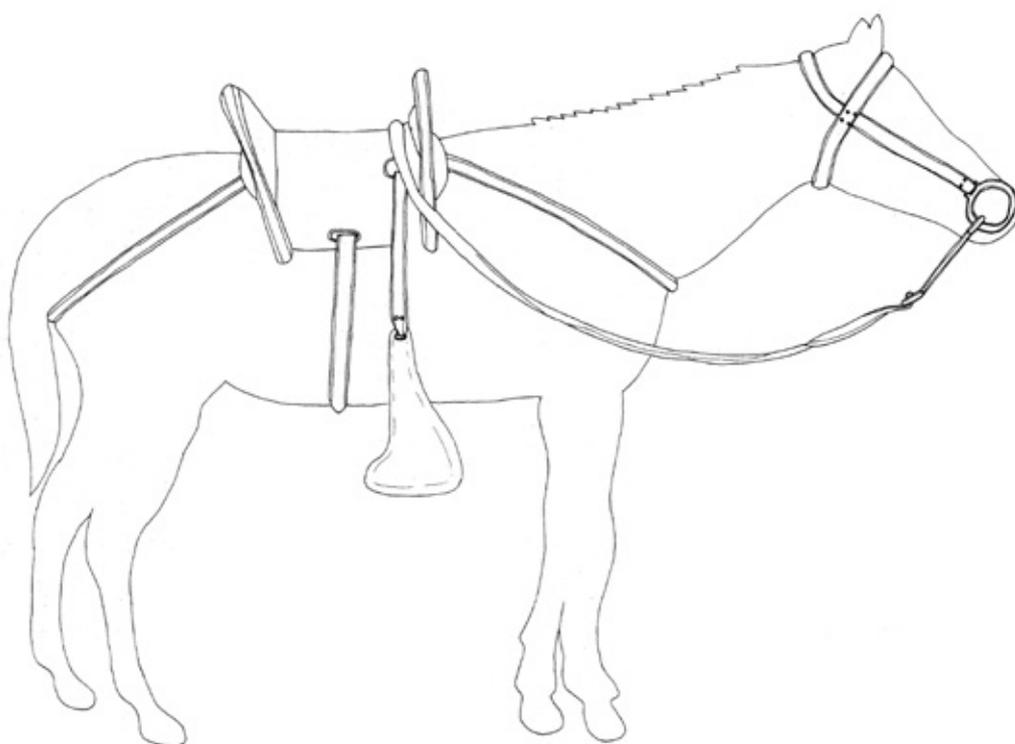
第5図 小碓橋際横穴群出土遺物2 (S=1/2)



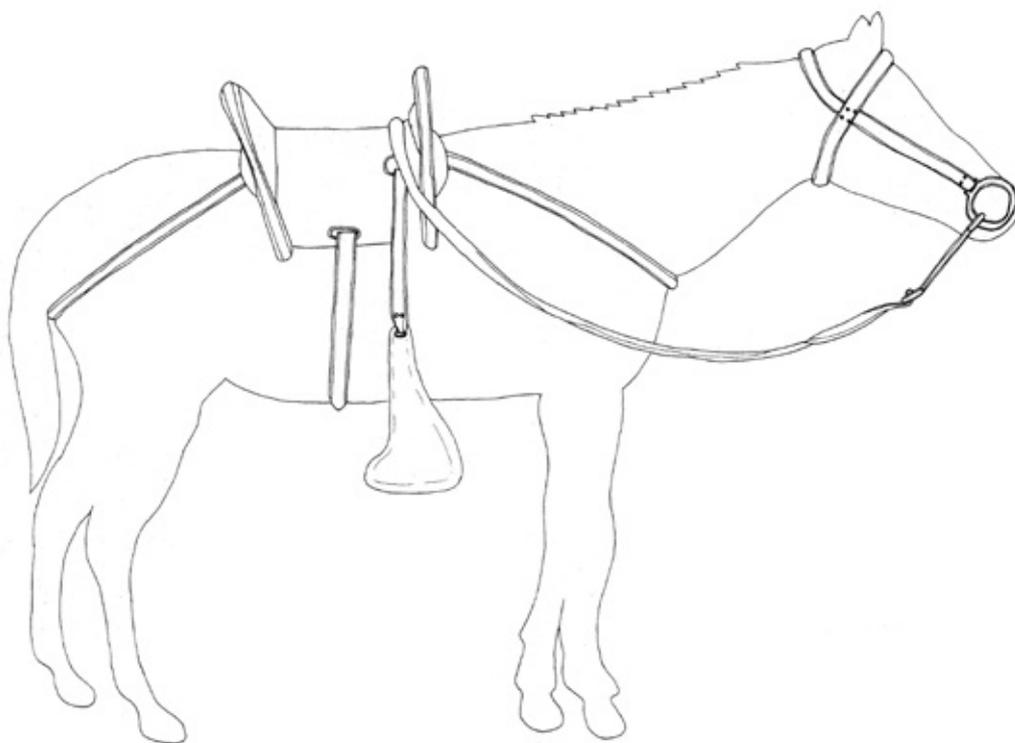
第6図 小碓橋際横穴群出土遺物3 (S=1/2)



第7図 小碓橋際横穴群出土遺物4 (S=1/2)



第8図-1 小碓橋際横穴群の馬装復元1 (大型矩形立間環状鏡板付轡を中心とするアセンブリッジ)



第8図-2 小碓橋際横穴群の馬装復元2 (素環状鏡板付轡を中心とするアセンブリッジ)

は難しいが、TK43型式期～TK209型式期の幅の中で押さえておけば間違いないだろう。ただ、全体につくりが薄くなってきているので、TK209型式期に絞り込むことが可能かもしれない。

工具としては斧が出土している（第4図-17）。鉄製で、長さ10.4cm、幅3.8、袋部の長径3cm、短径2cmを測る。

馬具としては、轡2、イモガイ装辻金具1、イモガイ円盤2、鏡片1、鉤金具1、飾り鉾1が確認された。

轡はいずれも鉄製で、大型矩形環状鏡板付轡と素環状鏡板付轡がある（第6図）。

大型矩形環状鏡板付轡（第6図-1）は鏡板の高さ8.8cm、幅8.8cm、引手の長さは18.6cmと17.8cmで先端は屈曲させている。銜は2連銜で長さは17.6cmである。鏡板の大きさなどからみて、陶邑古窯跡群の須恵器の型式でいうところの、TK43型式並行期（6世紀後半）のものである可能性が高い。

素環状鏡板付轡（第6図-2）は、左の鏡板の直径5.4cm、右の鏡板の直径5.6cm。引手はなく、銜は2連銜で長さ20.2cmを測る。この轡の引手が失われたものか、当初からなかったのかは判断が難しいところだが、古墳時代の通有の轡の場合、引手を伴うものが大多数を占める。時期については、前述の大型矩形環状鏡板付轡より一段階新しい、TK209型式並行期のものと考えておきたい。

第7図-1、2は鉄製の鞍（しおで）である。1は輪金の長さ6cm、幅4cm。円形の座金具の直径4.2cmを測る。2は輪金の長さ6.4cm、幅3.6cm、同じく座金具の直径は3.8cmである。輪金にT字形の刺金を伴っていないことからTK43型式期以降のものと考えられる（宮代1996）。

第7図-3は中央部に輪切りにしたイモガイを嵌め込んだ「イモガイ装辻金具」である。鉄製で、鉢部の直径5.6cm、脚部まで含めた最大幅9cm、高さ1cmを測る。四方に突き出す脚は、先端がやや丸みを帯びる隅丸方形脚とでも言うべき形で、鉄製鉾1と鉄製の無紋の責金具1を用いて繫に装着する。残っている鉾の一つは、鉾頭と脚との間2mm程度の空間が認められ、一見、宙に「浮いた」状態に

なっている。古墳時代の他の出土例からみて、この部分には薄い円盤状に加工されたイモガイが嵌め込まれていた可能性が高い（宮代2010）。また、輪金の内部には現在、イモガイを認めることはできないが、内面を観察したところ、イモガイが嵌め込まれていた痕跡である縦状の畝を見つけることができた。TK43型式期～TK209型式期の製品である。

第7図-4、5はイモガイを輪切りにした円盤である。4は直径5cm、厚さ2cm。5は3.4cm、厚さ0.8cmを測る。中央に穴などがあけられていないことから、筆者のいう「イモガイ装飾金具」ではなく、いずれも当初は、イモガイ装辻金具に嵌め込まれていた可能性がある。やはりTK43型式期～TK209型式期の時期のものと考えられる。

第7図-6は鉄製の鏡の吊金具の破片である。壊れてしまっていて半分しか残っていないが、長さ9.4cmを測り、表面には1鉾を打つ。TK209型式期以降のものであろう。

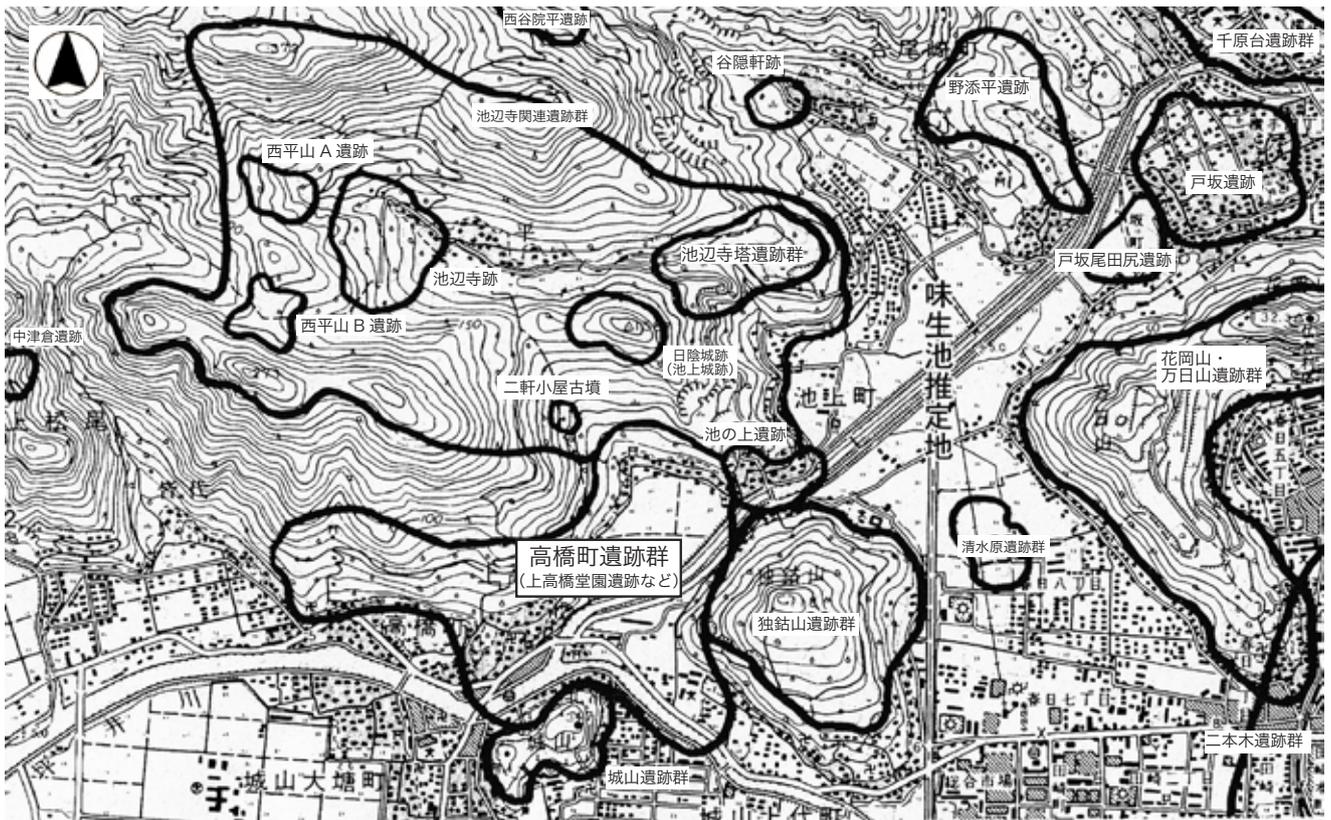
第7図-7は鏡板と繫との間を仲介する鉤金具と考えられる。鉄製で、残存長4.2cm。幅2.2cmを測り、表面に鉄製の鉾3点を打つ。おそらくは第7図-2の轡に装着されていたものではないか。TK209型式期のものと考えられる。

第7図-8は、鉄製の飾り鉾と考えられるものである。鉾頭の直径1cm、高さ0.9cm、鉾脚まで含めた長さ3.4cmを測る。このような鉾は千葉県城山1号墳や同県の金鈴塚古墳などから出土しており、おそらくは鞍などの表面に打たれていたものと推定される（宮代2015）。TK209型式期のものであろう。

4) 馬装の復元、及び小結

以上、小碓橋際横穴群からは少なくとも2組以上の馬具が出土していることが明らかになった。これらの馬装を復元してみると、第8図のようになる。1は大型矩形立間環状鏡板付轡を中心とするアセンブリッジ（馬装の組み合わせ）である。この種の轡はイモガイ装辻金具と組み合わせる可能性が高いため、そのように復元した。面繫に辻金具3点を装着し、鞍のみ金属製の鞍を載せ、そこから鉄製の三角錘形壺鏡をつり下げる。

2は素環状鏡板付轡を中心とするアセンブリッジ



第9図 上高橋堂園遺跡及び周辺の遺跡（網田2009に加筆）

である。こちらは他に馬具を伴わず、鏡板に鉤金具のみを取り付け、それを介して轡と繫をつないでいる。

小碓橋際横穴出土の馬具の特徴としては、イモガイを嵌め込んだ辻金具を伴っている点をあげることができるだろう。

この種の鉄製の雲珠・辻金具類はまず、6世紀初頭にあたるMT15型式期に韓半島から招来されるが、6世紀後半のTK43型式期になると、数が急速に増えることから、列島内でも生産が行われるようになった可能性が高い。

九州での類例としては、宮崎県高千穂町の南平55-1横穴などをあげることができる（ちなみに同例でも大形矩形立聞環状鏡板付轡を伴う。時期はTK43型式期）。

このようなイモガイ装辻金具は、西日本から比較的多く出土しているが、倭王権が製作したと思われるスタンダードな大形矩形立聞環状鏡板付轡などとアセンブリッジを組むことが多いことから、筆者は、地元で独自に製作していたというよりも、倭王権支

配下の工房で製作され、各地に配られたのではないかと考えている。

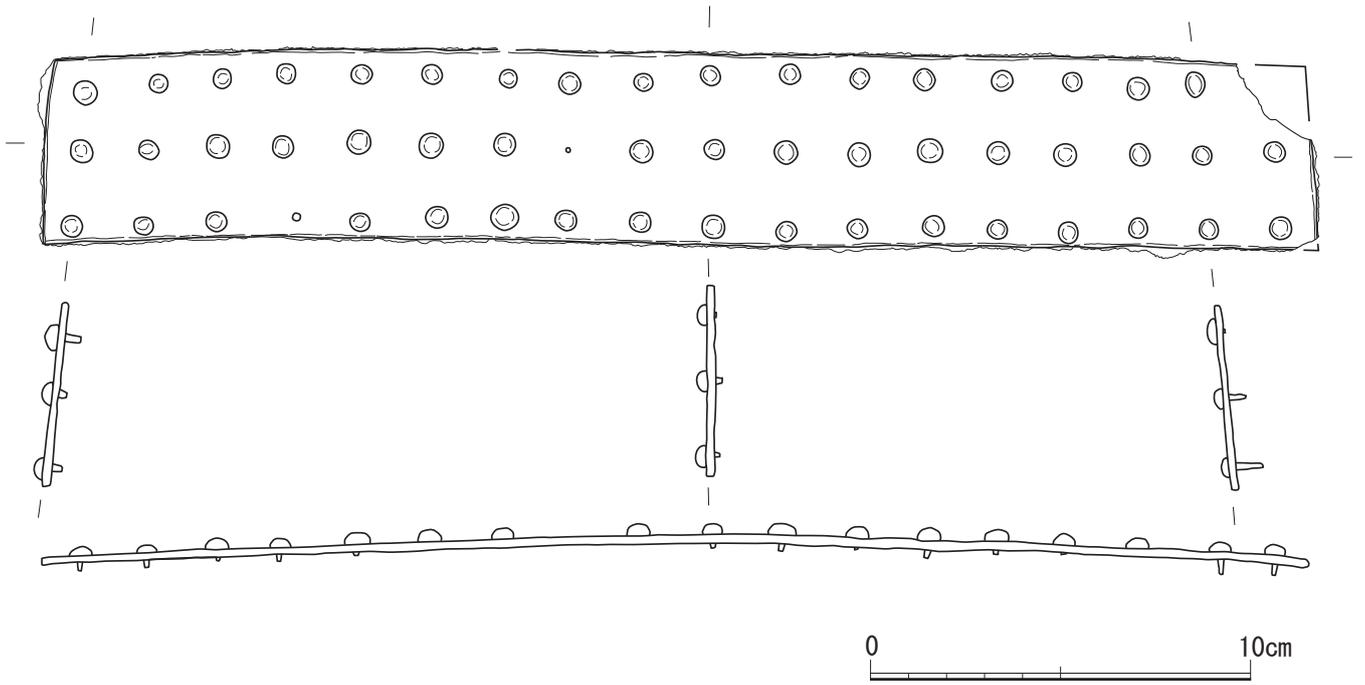
ちなみに、同じイモガイを使用した馬具でも、脚や輪金を持たない「イモガイ装飾金具」は熊本市内では北岡横穴群から出土している。こちらはイモガイ装飾金具の中央部のみを取り出して誕生したと考えられる馬具で、時期的には、小碓橋際横穴例のような辻金具の方が先行したものと考えられる。

（宮代）

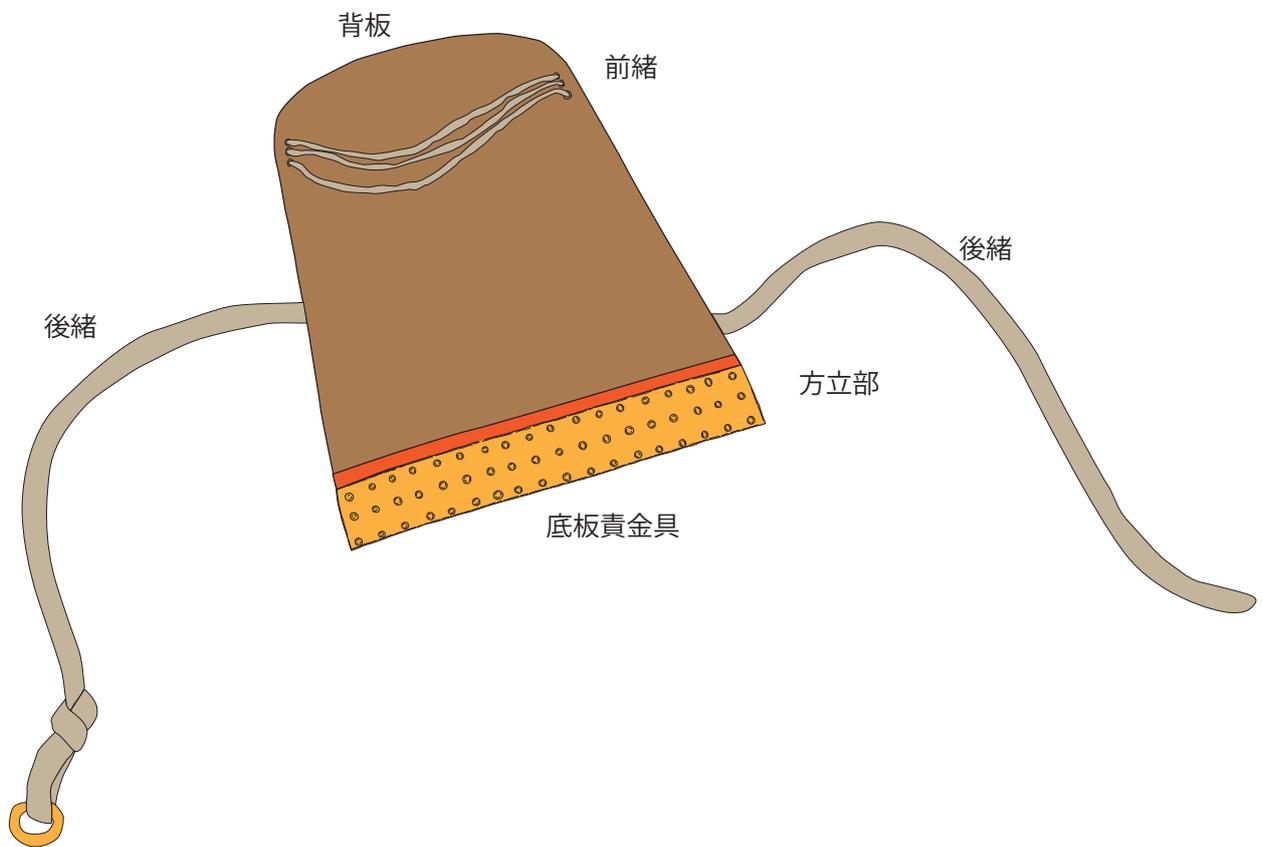
4 上高橋堂園遺跡出土の胡倭金具について

1) 遺跡の調査

上高橋堂園遺跡は、熊本市西区上高橋に所在する。坪井川右岸の小松山東麓に位置し、丘陵斜面（標高約12m）に立地している。1968年5月、桃園の施肥作業中に須恵器が出土し、市立三和中学校の坂為清教諭を通じて熊本市教育委員会に連絡があり、同年6月に坂教諭、市教育委員会の鈴木喬氏、熊本博物館の富田紘一氏、県立第二高校考古学部によって確認調査が行われている。



第10図 上高橋堂園遺跡出土遺物 (S=1/2)



第11図 「矢立背負式胡籛」復元想定図

調査地は、表土下約25cmで地山があり、落ち込みのなかに石列と遺物があったという。小範囲の調査であり、遺構の状態等は判然としないが、出土している遺物は古墳の副葬品に多いものであり、破壊された古墳が存在する可能性が高い。地主の徳永氏宅には、近くから出土したという箱式石棺の棺材があり、一連の古墳群と考えられる。土師器には盃・坏・高坏があるが、盃以外は細片であったという。須恵器は、蓋・坏・提瓶・甕・埴があるが、甕と埴には少し時間差があり、6世紀前半から後半の幅がみられる。

鉄器は、鉄鏃、手鎌、鎌(?)、鋌留の鉄板がある。鋌留の鉄板は、幅の広いものと狭いものとの2種があり、カーブをもたない平板である。

(美濃口)

2) 収蔵に至る経緯

昭和43年(1968)の調査・発見から約50年間、出土遺物は一括して当館に収蔵されている。このうち、前述の「鋌留の鉄板」については資料の破損・劣化が見られたため、平成20年度(2008)に専門業者へ保存修復を委託した。その際に鋌が銀製であること、その他様々な特徴から「胡籙」である可能性が高いこと(その根拠は次項で詳しく述べる)が明らかとなり、修復後は解説を加えて常設展示に陳列していたものである。

(美濃口)

3) 遺物の詳細

上端残存長31.6cm(復元長33.5cm)、下端残存長33.4cm(復元長34.1cm)、高5.3cm、厚0.3cmを測り、台形を呈する薄い鉄製金具である。断面形は緩い弧を描く。鋌頭径0.6cm、鋌頭高0.3cm、鋌足長0.4~0.7cmを測る半球形鉄製鋌は、3列に1.3cm間隔に等間隔で平行に打たれる。両短側辺側2列は外形に沿って85°で内傾する。鋌足が垂直に伸びる事から木製方立部前面及び木製底板に打ち込まれていたと推定される。方立部を想定した場合、上中段の鋌足長が0.4cm程度である事から板厚が約0.5cmとなる。下段鋌は、底板に打ち込むために上段2列に比べて鋌足が長いと推定される。

金具裏面には12条/1cmの布目(平織)痕が観

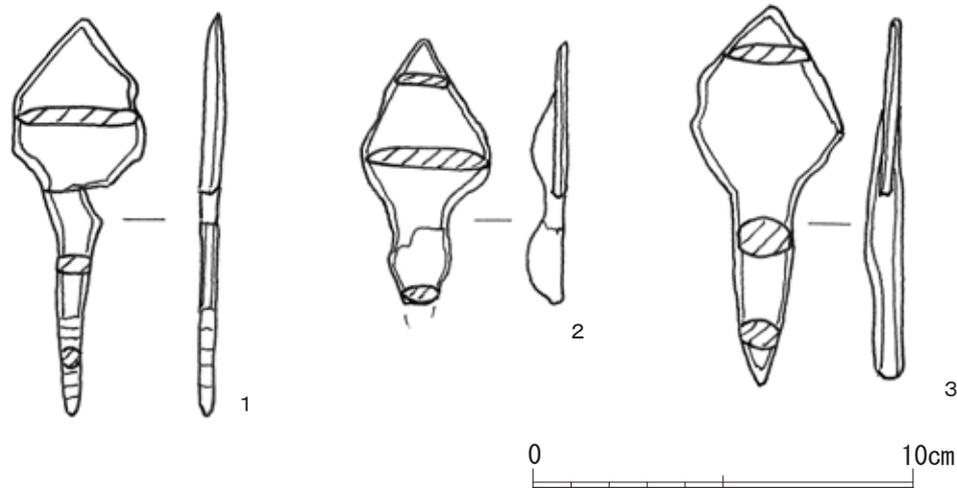
察出来る。ただし、金具外縁での折り返しは確認されず、縁飾が伴ったかは不明である。布目痕を覆う様に皮革痕が観察され、獣毛等が遺存しない事から鞣革と推定される。木質は未確認である。

時期はTK43式併行期である。

鉄製金具が全周することなく、全長が30cmを超える台形を呈し緩い弧を描く事から、横幅が広く断面形の前面が緩い弧を描く方立部が伴う「矢立背負式胡籙」(栗林2009)いわゆる「平胡籙」の方立部横長飾金具と位置付けられる。

正倉院中倉「葛製漆塗平胡籙」に併せて形態を復元する。鉄製横長飾金具は正台形の位置で方立部最下段に鋌で装着される。前稿では、金具を逆台形に配置することで上方に開く方立部正面形状を提示した(栗林2009)。一方、土屋隆史は京都府柿谷古墳第1主体部出土例を基に、台形を呈する鉄地金銅張飾金具を正位置に配置し、下側に鉄製金具が底板責金具として固定する復元案を提示した(土屋2013)。また田中新史や坂靖によって鉄地金銅装横長飾金具が鉄製金具と一対で方立部を構成することは指摘されてきた(田中1988, 坂1992)が、上高橋堂園遺跡では底板責金具としての鉄製金具は未確認である。京都府女谷B支群18号横穴出土鉄地金銅装横長飾金具に伴う鋌の足は細く短いのが特徴で、方立部前面に固定するのが目的である。一方、鉄製金具に伴う鋌の足は長さは不明であるが太いのが特徴で、底板に固定する為と推定される。

上高橋堂園遺跡出土金具では鋌足長に違いがあり、最下段のみが鋌足長が長いものに対して上中段鋌足長が短い事が特徴で、底板に打ち込まれていたと推定されることから、長辺側が下端となる事が確認された。また、1列鋌の鉄製金具が伴わない事も特徴である。こうした点から、方立部前面の飾金具と底板責金具としての機能を1枚の鉄製品で兼用する為に、鋌足長が異なる3列鋌が伴う鉄製横長飾金具が採用されたと位置づける事が出来る。類例には福岡県福岡市桑原石ヶ元7号墳があげられ、法量(金具高、厚)や鋌配置は類似するが、短側辺内傾角が81°とやや急である。一方、巨勢山古ミノ山支群2号墳東棺出土鉄地金銅装横長飾金具の内傾角は80°を測



第12図 上高橋堂園遺跡出土遺物2 (S=1/2)

り、近似する。なお、復元の参考にした葛製漆塗平胡籥の内傾角とほぼ一致する。内傾角の差は鉄製金具の多様性を示している。一方で内傾角のみを基準にすると、“鉄地金銅装横長飾金具+鉄製金具”から“3列鋌鉄製横長飾金具(内傾角急)”さらに“3列鋌鉄製横長飾金具(内傾角緩)”の変化も想定が可能である。ただし短側辺が遺存する資料が少ない事や3列鋌鉄製横長飾金具の資料数が少ない事から、型式設定や組列は今後の課題である。

矢を盛る木製方立部には鞣革を張り、更に平織を蒔いたと想定復元する。金具下端が底に合致し、最下段鋌中心が底板厚中央にも合致すると想定した場合、底板厚は1~1.2cmとなり、方立部内法高は4cm程度である。この内法高は紫檀螺鈿宝相華鳳凰文平胡籥の方立高4.5cm(内法高は不明)と近似している事や、長頸鋌ならば鋌身部を露出することなく矢を盛る事が出来る高さである。金具端部で折り返した縁飾りは不明であるが、方立部高が大きくならない限りとする例が多いが、先述のように未確認である。なお、上差矢と征矢を区画固定する矢配りの板や櫛形の板が伴うかは不明である。背板高は約35cm程度となる。上方には矢柄を固定する前緒を想定する。

装着する際に使用する後緒は、背板左右でその装着孔の位置を違える。「矢立背負式胡籥」は他の垂下式胡籥と違い、方立部底部を背中腰付近に、背板が

背中前面を覆う様に装着する。後緒左右装着孔の位置は背板両端部で上下方向にずらす事により、装着時には後緒装着孔が水平になり、矢羽根が左肩上方を中心に広がる事になる。方立部より鋌身部を保持して矢を抜き、弦に番える場合、矢羽根が左肩付近まで傾いた状態の方が矢を抜きやすいという機能が反映されたためと想定する。

上高橋堂園遺跡出土胡籥金具は、古墳時代後期における矢立背負式胡籥に伴う金具の分類や型式設定を研究する上で基礎資料であると共に、古墳時代盛矢具と古代「平胡籥」を結びつける資料である。

(栗林)

上高橋堂園遺跡からは、栗林氏が報告した胡籥のほかに、鉄製品として鋌3点が出土している(第12図)。すべて広身の鋌で、1は全長10.6cm、鋌身部の幅3.5cm、2は残存長3.5cm、鋌身部の幅3.2cm、3は全長10cm、鋌身部の幅4cmを測る。いずれも同じ型式で、短頸撫角関柳葉広身鋌に相当するものと考えられる。TK43型式期~TK209型式期のものであろう。

(宮代)

おわりに

以上、熊本博物館が所蔵する小碓橋際横穴群と上高橋堂園遺跡から出土したとされる、土器を除く遺物類について、報告を行ってきた。

今回の調査で、小碓橋際横穴群では、従来よく知られてきた大形矩形立間環状鏡板付轡のほかにイモガイ装辻金具などを新たに確認し、また、上高橋堂園遺跡では実測図こそ公表されていたものの、詳細がはっきりしなかった平胡籙について再検討し、その位置づけをはっきりとさせた。

すなわち、小碓橋際横穴群から出土した、イモガイ装辻金具+大形矩形立間環状鏡板付轡のアセンブリッジは、倭王権がこの種の馬具の組み合わせを九州地方の横穴群の被葬者に、比較的ポピュラーなセットとしてしばしば配布していたことの証左となる（宮崎県南平55-1号横穴の類例等がそれを裏付ける）し、福岡市の石ヶ元7号墳から類例が出土している上高橋堂園遺跡の胡籙金具は、古墳時代の盛矢具と古代軍制の平胡籙を結びつける資料として貴重であることがわかった。

過去に出土した資料の再検討は地味ではあるが、半ば忘れられた遺物に光をあて、新たな位置づけを与えることで、地域史の研究、さらには古墳時代遺物を巡る基礎研究に寄与する重要な作業である。筆者らの調査にご快諾をいただき、協力してくださった関係者の皆様に感謝を申し上げたい。

【引用文献】

- ・渡邊一徳1998「二 地形発達の概要（熊本市および周辺地域の地形分類図）」『新熊本市史 通史編 第1巻 自然／原始・古代』熊本市
- ・松本健郎1996「小碓橋際横穴群（陳内・宇留毛周辺古墳・横穴分布図）」『新熊本市史 史料編 第1巻 考古資料』熊本市
- ・乙益重隆1971「宇留毛小碓橋際横穴群」『熊本市北部地区文化財調査報告書』熊本市教育委員会
- ・網田龍生2009「第2章 遺跡の位置と環境（周辺遺跡分布図）」『池辺寺跡X I—平成19年度発掘調査報告書—』熊本市教育委員会
- ・宮代栄一1996「古墳時代の金属装鞍の研究—鉄地金銅装鞍を中心に—」『日本考古学』第3号 日本考古学協会
- ・宮代栄一2010「有機質の鉢ないし座と嵌め込んだと考えられる雲珠・辻金具について—古墳時代馬具

研究における微細な有機質痕跡の観察法をめぐる一考察」『九州考古学』第85号 九州考古学会

・宮代栄一・林田和人・美濃口紀子2014「熊本市稲荷山古墳出土遺物の研究」『古文化談叢』第71集 九州古文化研究会

・宮代栄一2015「金鈴塚古墳出土馬具の研究・補遺」『金鈴塚古墳研究』第3号 木更津市郷土博物館金のすず

・栗林誠治2008「胡籙に関する基礎的考察（1）」『青藍』5号 考古フォーラム蔵本

・栗林誠治2009「胡籙に関する基礎的考察（2）」『青藍』6号 考古フォーラム蔵本

・早乙女雅博1988「古代東アジアの盛矢具」『東京国立博物館紀要』第23号 東京国立博物館

・鈴木敬三編1996『有職故実大辞典』吉川弘文館

・田中新史1988「古墳出土の胡籙・鞞金具」小川貴司編『井上コレクション 弥生・古墳時代資料図録』言叢社

・土屋隆史2011「古墳時代における胡籙金具の変遷とその特質—朝鮮半島南部・日本列島出土資料を中心に—」『古文化談叢』66 九州古文化研究会

・土屋隆史2012「日朝における胡籙金具の展開」『考古学研究』第59巻第1号 考古学研究会

・土屋隆史2013「平胡籙の出現過程」岡内三眞編『技術と交流の考古学』同成社

・坂 靖1992「胡籙の系譜」『考古学と生活文化II』同志社大学考古学シリーズV 同志社大学

【参考文献】

・富田紘一1969「上高橋堂園遺跡」『熊本市西山地区文化財調査報告書』熊本市教育委員会

・網田龍生1992『上高橋高田遺跡 第1次調査区発掘調査概報I』熊本市教育委員会

・美濃口雅朗1995『つつじヶ丘横穴群 発掘調査概報II』熊本市教育委員会

・松本健郎1996「上高橋堂園遺跡」『新熊本市史 史料編 第1巻 考古資料』熊本市

・宮代栄一1996「熊本県出土の馬具の研究」『肥後考古—古墳時代小特集—』第9号 肥後考古学会

・小川貴司編1988『井上コレクション 弥生・古墳時

代資料図録』言叢社

・美濃口雅朗2002『つつじヶ丘横穴群—発掘調査報告書—』熊本市教育委員会

・美濃口紀子2013「熊本県あさぎり町才園古墳出土馬具の組み合わせと装着想定図について」『熊本博物館館報』No.25 熊本博物館

・美濃口紀子2014「才園古墳出土馬具（国指定重要文化財）の装着模型製作について（報告）」『熊本博物館館報』No.26 熊本博物館

・美濃口紀子2016『黄金文化への憧れ—国指定重要文化財 才園古墳出土品—』熊本博物館